

地域活性化を目指す女性漁業士

～子供達に未来を託す～

青森県漁業士会日本海支部

三ツ谷 栄子

1. 地域の概要

青森県漁業士会日本海支部が活動を行っている地域は、日本海に面する津軽半島西海岸一体の2市3町で、南部の鱒ヶ沢町・深浦町では「世界自然遺産白神山地」を背に輝かしい夕陽が映える海岸線が続く自然豊かな地域である一方、北部の中泊町・五所川原市・つがる市では、十三湊遺跡など数々の歴史的遺産の多い地域である。(図1)

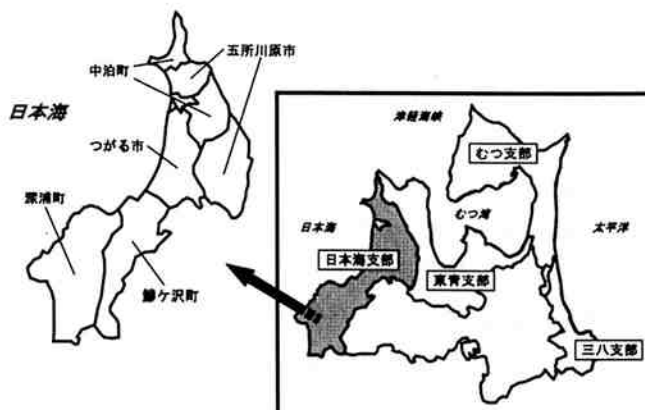


図1－管内図

2. 漁業の概要

当地域での沿海漁業協同組合数は13漁協で、組合員数は3,170人となっている。主な漁業は、イカ釣り漁業、底建網漁業、一本釣り漁業、刺網漁業、採介藻漁業等外海での漁業の他、北部の十三湖では内水面漁業のシジミ漁が営まれている。平成17年の海面での漁獲数量は約9,798トン、漁獲金額は約47億円であり、漁獲対象魚種はスルメイカ、ヤリイカ、ウスメバル、マダイ、ヒラメなど様々な魚種の水揚げが見られる。

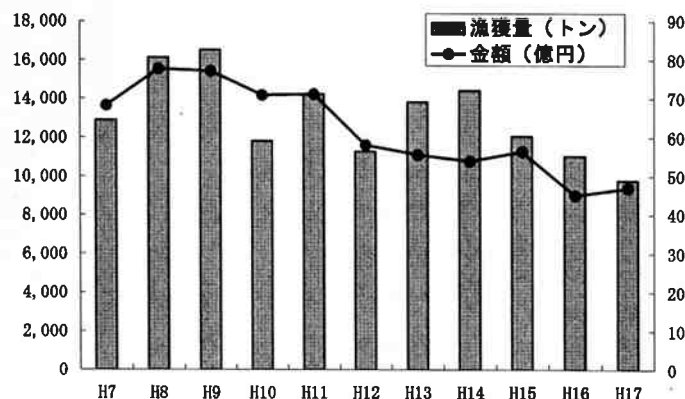


図2－管内の水揚げ金額

近年は大型クラゲ出現や魚価低迷等の影響により漁獲数量・漁獲金額ともに減少傾向にある。(図2)

3. 研究グループの組織と運営

漁業士会日本海支部は、青森県漁業士会の下部組織の一つとして平成7年に結成され、会員数は8漁協から推薦、認定された19名で、うち2名が女性漁業士である。

役員は会長1名、副会長1名、理事4名、監事2名で構成されている。総会は4月に開催し活動計画等を審議している。活動経費は、会員からの会費、会員の所属している市町・漁協及び青森県漁業士会からの助成金からなっている。主な活動内容は、海浜清掃、研修会、他支部との交流会などである。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

青森県では平成13年度に初めて女性漁業士が誕生して以来、現在4支部で計10名となっているが、全体の漁業士155名に比べ非常に少なく、知名度も低いように感じられる。他県でも同様な状況で、「女性漁業士としてどのような活動を行ってほしいのか、私たちに何が出来るのか」という声が多く聞かれ、役割が明確になっていないようである。このことから、私たちは地域活性化を目指し色々な活動に取り組んできている。

5. 研究・実践活動状況及び効果

1) 青森県立海洋学院生ホームステイ

全国でも数少ない漁業後継者育成機関である青森県立海洋学院では、平成13年度から漁業後継者としての認識と就労意識を持たせるため、青森県漁業士会の協力のもと各支部が持ち回りで、生徒のホームステイ受け入れを行っている。

平成18年は日本海支部が担当で5月と9月に14名の生徒を2名ずつ7名の漁業士が受け入れた。それまでは男性の漁業士ばかりであったが、女性漁業士として私が初めて受け入れを行った。

私の家では底建網漁業を営んでおり、5月は網入れの時期であるため、その作業の手伝いをしてもらうことにした。初めは生徒の気持ちや技量が分からなかったため、一緒に沖に出るのは無理だと考えていた。沖に出るためには朝4時出港であり、3時半には起床しなければならないが、生徒は沖に出たい気持ちから、きちんと起床し仕事に取り組んだ。その強い熱意と姿勢に押され、一緒に沖に出ることとした。沖では船酔いもせず、一生懸命に仕事を覚えようとする姿を見て、私は漁師になるための意気込みを感じた。「次回来るときは、もっと仕事出来るように勉強してきます」との言葉を残し、5



写真-1 ホームステイ受け入れの様子(網修繕)



写真-2 ホームステイ受け入れの様子(船整備)

月の受け入れが終了した。

9月には網入れ前の準備期間であったため網の修繕及び船の整備を手伝ってもらった。生徒は自ら網の修繕箇所を見つけ率先して手伝ってくれた。二泊三日という短い期間であったため、全ての網の修繕は出来ず、生徒は心残りのようであったが、「任された仕事は最後までする」という姿勢に、5月と比べ漁業に向かう意欲を強く感じた。(写真1, 2) 仕事が終わるご飯を食べながら話をしていると、

「将来は日本一のマグロ釣り・いか釣りの船頭になりたいと思っています」また

「海洋学院は将来必要な資格を習得できるので楽しみにしています」など、たくさんの夢を語ってくれた。今時の何をしてよいのか分からない若者が多い中で、目的を持って頑張っている生徒はたくましく思い、後継者としての頼もしさも感じた。

ホームステイ終了後、閉校式が行われ(写真3)生徒から受け入れた漁業士に対し感想・抱負が語られ、日本海支部会長より生徒に「前回の5月と比べ、今回は一回り大きくなっていて。今後に向けてなお一層向上心をもって頑張るように」とのエールが送られた。その後、私が受け入れた生徒から「今回学んだことを将来の宝物として頑張る。怪我の無いように、大漁して下さい」との内容の手紙をもらい感動し、元気も貰った。

最初、受け入れを引き受けた時は、「女性漁業士として本当に務まるのか」とかなり不安だったが、「何事も経験」と無我夢中で取り組み、無事終わることができ、女性漁業士としての自信に繋がった。また、若い人の漁業に対する考え方やとらえ方も知ることができ、とても良い経験となった。

今後も、若手漁業者を育成するための活動に取り組んで行きたいと考えている。

2) お料理教室・お魚捌き方教室

地元で獲れた魚を使い、小学生を対象としてお料理教室を開催している。今年度は、マダラのフライ及び子和え、ヤリイカの刺身そしてホッケのすり身汁作りを行った。参加したほとんどの子供は、一匹丸々の魚を捌いているのを見た事がなく、



写真-3 ホームステイ閉校式



写真-4 お料理教室の様子



写真-5 お魚捌き方教室の様子

私がマダラを捌き始めると興味津々といった感じで目を輝かせ、魚への関心が高まったようであった。試食では子供達自ら料理した事も手伝い「おいしい、おいしい」と好評を博し、今後も続けていく予定である。(写真4)

また、魚に触れることの少ない若いお嫁さんを対象とした魚の捌き方教室も行っている。今年度は、捌くのが難しいといわれるヒラメについて指導を行った。指導を受けた若いお嫁さん達は、捌ける様になった喜びよりも、自ら捌いた魚を家族に食べてもらえるという喜びの方が強いようであった。また普段は捨ててしまう魚の骨を「スープの材料にする」といって持って帰るなど、魚食への関心が向上したと感じた。(写真5)

3) 三県女性漁業士研修会及び青森県農林水産祭

青森県・岩手県・宮城県の三県の女性漁業士が集まり、「これからの漁業の問題点」や「女性漁業士の役割」についての議論を行い地域活動に役立っている。平成18年には、茨城県や千葉県もオブザーバーとして参加するなど、各地域にネットワークが広がってきている。

各県共に、「漁業士及び女性漁業士の知名度が低い」との共通の問題点が挙げられ、それがきっかけとなり平成18年

11月に開催された「青森県農林水産祭」

において女性漁業士のブースを設けることとなった。他支部の女性漁業士と共同で参加し青森県各地域での生鮮品・加工品等の販売を行った。各支部の女性漁業士が一堂に会し、このような活動を行う事は今回が初めてであり、各地域の方々から加工品の販売委託を受けるなど、漁業者と消費者のパイプ役となっていることを改めて認識した。これからも生産者として顔の見える販売活動を行い、安心安全で品質の良いものを提供し続けて行かなければならないとの想いを確認しあった。(写真6)



写真-6 青森県農林水産祭の様子

6. 波及効果

海洋学院のホームステイは、生徒の漁業後継者としての意識向上に繋がったと思われる。卒業生から漁業士として活躍している人も出るなど、将来、高齢化している地域を盛り上げるリーダー的人材になると期待している。また、男性が適任と思われがちな活動であるが、女性漁業士として担当し、無事終えたことから、新たな女性漁業士活動への一環になると思われる。

お料理教室は子供の頃から魚に慣れ親しんでもらうことにより、魚離れの歯止めに繋がり、また漁業への関心が高まると思われる。それがきっかけとなり、漁業を志す若者や自然環境に関心を持った人が増えることを願っている。お魚捌き方教室に参加した人たちからは、「またヒラメを買って捌いてみた」や「魚を捌くのが上手になった」との声が聞かれ、魚に触れる機会が多くなったように感じられ、また、開催依頼が増えるなど、魚食普及は着実に進んでいると思われる。さらに、これらの取り組みは地

場産品を使用しており、「食の安心安全」への意識向上にも繋がっていると考えられる。

農林水産祭での活動は、漁業士の知名度向上及び地元漁業者との連携強化になっており、地域活性化に貢献できていると考えられる。

7. 今後の課題や計画と問題点

現在、女性漁業士は県内に10名と少ない人数ではあるが、「継続は力なり」ということから、地域に密着した活動を積極的に続けていく必要がある。そのことにより、女性漁業士の増加も望まれる。また、他支部・県外女性漁業士との広域的な連携を強め、お互いの知恵や情報を交換し合いながら活動を推し進めていく必要もある。